

○ブックショートアワード（短編小説）応募作品

① タイトル

迷いっ子

② 筆名（ふりがな）

田向 秋沙（たむかい あいさ）

④ あらすじ

どこの誰かも判然としない迷子は涙目になりながら、二人の子供に対して、遊びの相手をするよう求めた。夕暮れ時、その迷子と遊んでいるうちに、二人の少年は草地に置いてけぼりを食らうことになる。その迷子の正体は、誰しもが一生に一度だけで出会うことになる「迷いっ子」だった。

⑤ 特記事項

在りし日の郷愁

⑥ 字数

四七六一文字

誰もが子供のころに、出会っているはずだった。夏の終わりに少しだけ肌を刺す風が吹いて、そろそろ家に帰らなければ親に叱られそうな夕日のなかで、その子は突然姿を現わす。

腹を減らした稔が駆けだして、人気のない通りを折れる。康夫も稔のあとを追いかけて走ってゆく。そこまでくると、ふたりの家はすぐそこにある。稔が突然立ち止まって、康夫の方を振り返った。

「誰だ。あそこにいるのは？見かけないやつだ」

稔の家のすぐ傍に子供が一人立っていて、こちらの方を見ている。ハンチング帽をかぶり、首に赤い布を巻きつけた少年は近在では見かけることのない風貌であり、漫画のなかの登場人物のような不思議な魅力を放っていた。

「知らないな」

康夫にも見当の付かない少年だった。稔の家の少し先の方に康夫の家がある。ふたりして、今度は歩度を緩めて進んでゆく。小さな町の一角で見知らぬ子供と出くわすことは、珍しいことだった。それも一人でいるのだから尚更なのである。夕餉の時間も迫っていた。子供であるなら、誰であっても家に入らなければならない時間なのだ。

ふたりして意気地がないので、先頭を走っていた稔はいつのまにか康夫の隣を歩くようになり、康夫の方でもこれまでのように稔を先に行かせようと僅かに足を遅くしたことから、その少年と向き合うまでには、それなりの時間を要することになった。

見知らぬ少年は、不審げに近づいてくるふたりの子供のことを待ち受けているかのようになり、じっと見つめてその場を動かうとはしなかった。少しだけ強い風が吹いて、首筋の赤い布の先を揺らした。夕日を背中から受けている少年の顔は、近くに寄るまでわからなかった。真っ黒に日焼けしていて、稔や康夫とは遊び方の質が違うらしく見える。

「君たち、やあ、こんにちは」

見た目とは違って、意外と弱々しい声音で少年の方から声を掛けてきた。このような言い回しは聞き慣れないので、稔は酷く戸惑った。自分らと同じ年代と思われる子供の話し方ではないと思った。不自然な沈黙が続いたので、口を閉じたままじっとしている稔に代わって、康夫が恐る恐る「こんにちは」と返した。

三人が稔の家の前で立ち止まっていることになる。稔はそのまま家のなかに駆け込むこともできた。もしそうしたなら、康夫も駆けだして、すぐ先にある自分の家に帰ったかもしれない。

でも、そうならなかったのは、その少年がすかさず、「ぼく、道に迷ってしまった……。なあ、一緒に遊んでくれないか」と言ったからだ。そう言ったあとに少年は涙目になった。この少年が、これまで不安な気持ちを孤独なままに堪えていたことを本能的に感じた稔の足は痺れた棒のようになって、動けなくなっていた。

「迷子って、この辺りの子なのか？」

康夫の言っていることは、至極的外れなのであったが、少年は涙を滲ませながら、この辺りがどの辺りなのか分からないのだと言った。

「名前は何て言うんだ」

稔は家に帰ることを諦めて、少年の顔を繁々と覗き見た。少年は涙を拭って応えた。

「アキト。オオタワラアキトっていうんだ」

オオタワラなどと言う姓は聞いたことがない。少なくともふたりが住んでいる近所には見当たらない名前なのだった。これは深刻なことだった。本当の迷子のようなだった。子供だけでは手に負えぬ状況だった。

「取り敢えずうちに来い。かあちゃんに聞いてみる」

稔にはそれくらいしか方法が見つからない。

「いや、そうでなくて……。ちよつと、一緒に遊んでくれればいいんだ」

頑なな少年の意思が不可解なのだが、彼は梃でも動かぬようだった。

「遊ぶって、何をしたいの？」

困っている稔に代わって、康夫が訊ねた。

「何でも、君たちがいいと思うものを……」

そう言われても困るばかりだ。夕日が沈み地平線に近づいて影の色が薄くなってくる。

その上、ふたりとも腹を空かしている。少年だって同じことだろう。もう子供が外で遊ぶ時間ではなくなっている。

「なあ、一体どうしたら迷子になんかなるんだよ」

丁度いい遊びが思いつかなくて、康夫が話題を変えた。

「仲間と遊んでいて、置いてけぼりをくらったんだ。気づいたときには、ぼく一人になっていた」

そんな状況を想像することは康夫にはできなかった。知らない場所で仲間とはぐれるなんて。涙を浮かべていた少年は稔と康夫が近くで接することで、多少は心持ちに余裕ができた様子だった。

「方角くらいは見当がつかないか？」

遊びのことなど考えている暇はなかった。稔は作戦を変えて、アキトの進むべき方向を探ろうとした。

「さっぱり、わからない。ここは何ていうところなんだ？」

「鯛町だよ」

康夫が答えた。最近になってようやく町の名前を漢字で書けるようになったばかりだった。それを誇らしく思っていた。稔はまだ町の名前を漢字で書けないでいた。

「聞いたことがない。余程遠くに来てしまったんだろう。なあ、遊んでくれよ」

少年は妙に遊ぶことに固執していた。

「お前の住んでいる町はなんというのだ」

稔が核心をつくようなことを言った。町の名を聞き出せば、どうにかなるはずだった。

「ぼく、わからないんだよ。どこに住んでいたのかなんて」

「そんなこともわからないのか。お前、意外とお頭が軽いんじゃないか」

俄然有意に立ったようになり、稔がバカにしたような口を利くと、再び少年の目に涙が滲んだ。

「やめろよ。泣いてるじゃないか。ごめんな」

康夫がそう言うと、少年はすぐに泣き止んで顔を上げた。

「ぼく、影踏みがしたい」

「なんだよ。それっ。康夫、知ってるか？」

「知らない」

それはふたりが、今までやったことのない遊びだった。互いの影を踏み合うという単純なもののだが、日は微かに残っているばかりなのだ。それでも、少年がまた涙を流しては堪らないと想着て、少年の言うようなかたちで薄く残る影を踏み合った。泣いてばかりいた少年が、意外と俊敏に動くのでふたりとも呆気に取られることになった。最初は大して楽しくもないのだが、単純なことの繰り返しは次第に熱を帯びることになった。影を追っていくうちに、次第に家から遠ざかる羽目に陥った。腹を空かしていることも忘れて三人はいつの間にか影踏みに夢中になり、住宅街を離れて遂には息を切らせて走り回るまでになっていた。

愈々日が沈んで影らしきものが見当たらなくなっても、そこに影があるかのようにしてしばらくのあいだは燥ぎまわっていたのだが、突然、空模様があやしくなり小雨が降り始

めた。稔と康夫が暗くなった空を見上げた。微小の雨粒が頬に当たって冷たく感じる。

「まずいな。アキトどうする？」

稔が呟いて、周囲を見回した。少年の姿はどこにも見当たらない。

「えっ、あいつは？」

「いない！」

康夫も辺りを見回すが、ふたり以外には誰もいない。いくら日が落ちたとはいえ、そこは遮るもののない草地なのだ。

稔と康夫は草地のなかで弱い雨に打たれたまま茫然となった。今度は彼らが置いてけぼりをくらったのかもしれない。

「どこに行ったんだよ。折角遊んでやったのに」

幾分気色ばんで稔は声を荒らげたのだが、その気持ちは康夫にしても同じことだった。

その草地は、ふたりが住んでいる住宅街からはかなり距離があるところにあった。幸いそこがどこなのかは、ふたりには心当たりがあるのだったが、どうしてここまで来てしまったんだろうと後悔の念がもたげてくる。元はと言えば、迷子と称するあの少年のせいなのだ。

それほど面白くもないはずの影踏みなどという遊びに夢中になって、すっかり遠くにまで来てしまったことを悔いていた。

腹を空かせたふたりは、急ぎ足で家路に就いた。雨に濡れた体が冷えて、今にも泣きそうになりながら、住宅街の狭い通りにでると、家の前には稔と康夫の親が傘を差して右往左往している。叱られるだろうと思って、ふたりは怯えながら歩いていった。暗い夜道のなかを歩き通しで、ふたりともすっかり体力を失っていた。

「どこをほっつき歩いていたんだ。こんな時間になるまで！」

稔の父が大きな声をあげた。もつともなことだった。大粒なものに変わりかけた雨が住宅街に降り注いで、トタンの屋根を打つ音がかまびすしい。

傘のなかに匿われて、半べそをかきながら、「迷子がいたんだよ。その子のために遊び相手になっていたんだよ」と稔が言い訳をした。

「迷子だと。その子はどこへ行った？」

「それが、わからないんだよ。気がついたらいなくなっていた」

「本当なの？」

稔の母が聞いた。

「本当だよ。嘘なんかつかないよ。オオタワラアキトって名前だった」

「オオタワラだと？さて、この辺でそんな名前は聞いたことがないが……」

稔の父が頭を捻る。

「だから、迷子なんじゃないか」

稔と康夫がそれぞれの家のなかに入ると、空から落ちていた雨粒がすっかり消え去った。まるで彼らに狙いを定めているかのような雨だった。

少しばかり遅くなった夕餉の時間に、迷子のことがしきりと話題にされたが、稔には大人たちを満足させることのできる確たる情報がまるでないのだから、自ずとふたりの子供たちへの非難と話の矛先が向くばかりとなった。

気詰まりな時間が続くなかで、一緒に暮らしている祖母が、「迷いっ子かしらねえ」と小さく呟いた。少しばかり惚け始めている祖母の言葉に、特段注意を向ける大人はいなかった。しかしながら、稔にはその声ははっきりと聞こえていた。すると、それに呼応するかのように、奥の仏間から「ああ、迷いっ子か。そうかもしれない」という声が聞こえてきたような気がした。それは亡くなった祖父の声のようでもあり、そこにはいらない何かの心の声のようなものでもあったから、稔はそのことを口にはしなかった。

寝る前になって、稔は祖母の部屋に行き、こっそりと迷いっ子のことを訊ねてみた。

「迷いっ子かい？」

祖母はうれしそうに、過去を探るような表情を浮かべて話し出した。

迷いっ子が来ると、子供たちに悪さをして、仕舞には置いてけぼりをくらわせるというのだ。一生涯に一度きりしか会うことのない迷いっ子との出会いは、出会った子供たちにしてみると麻疹に罹るようなものだった。

子供たちが遊びの相手をしてくれると迷いっ子は、満足してどこかへ消えていく。迷惑な子供ではあるが、迷いっ子に気に入られた子供たちは元気に育つと言われている。

もしも、冷たくあしらって遊びの相手をしなければ、子供たちは見知らぬ土地に連れていかれ、そこで迷子になり、出会ったことの記憶も失われて、不憫な生涯を過ごすことになるらしい。

それは遠くの彼方にある寂れた記憶なのだった。そこまで話すと祖母は憑き物が落ちたかのように、いそいそと布団のなかに横になって眠ってしまった。

その夜、稔と康夫は熱を出して寝込んでしまった。ところが、翌朝になるとふたりとも

雨上がりの空のようにすっきりと元気になっていた。熱を出したのは、雨に打たれたせいなのか、それとも祖母が言う迷いっ子のせいなのかはわからない。迷いっ子の悪さなのだとしたら、少々、念が入っている気もするのだが……。

以後、祖母が迷いっ子のことを口にすることはなかった。あれほど饒舌に語っていたのが嘘であったかのように、元のままの祖母の姿に戻っていた。

二度と会うことのない迷いっ子のことを、いつまでふたりは覚えているだろうか。稔の祖母は、幸いなことに昔迷いっ子に会ったことを憶えていた。そしてひよつとすると稔の祖父も……。

稔は迷いっ子のことを誰にも話すことをしなかった。惚けた祖母の話を受取る者はいないだろうし、うまく説明する自信もなかったからだ。

でも、いつか子供の誰かが同じ経験をしたときには、祖母の語っていたことを伝えてみようと思った。

自分だけが信じていればいいことなのだと思う気持ちが強くあった。

(了)